
NPOサーベイ会報

2009-10年 活動報告号

Volume 1

会員の皆様へご挨拶

松尾浩一郎

初年度を無事に終え、こうして2年目を迎えることができました。ひとえに皆様方のお力添えがあつてこそです。心より感謝申し上げます。

いま振り返ってみると、たった4人で確固たる基盤もないまま法人を立ち上げたのは、やや無謀だったのかもしれない。都庁へ相談に赴いたとき、担当者に「要はお金。収入源がなければ組織は続かない」と諭されたことを覚えています。

受託調査を行うことである程度の収入はいただいておりますが、基本的にはお金とはあまり縁のない活動をしています。そういった意味で、都庁の担当者の眼からは「潰れそうな法人」に見えたのでしょうか。

でも幸いなことに、私たちにはお金では量れない何かがあつたようです。

なにものかもわからない謎の法人設立計画に会員として参加して下さった皆さんの存在は、本当に私たちの支えになりました。また、支えて下さる皆さんに顔見せできないような恥ずかしい活動はできないという、快い緊張感を感じることができました。

社会調査というきっかけを介したつながりを確かめながら、この1年間を過ごすことができたように思います。

これからもより自由に、よりしなやかに、皆さんとともに活動を展開していけたらいいなと思っております。今後ともよろしくお願いします。

1周年に寄せて

大島千帆

はじめにサーベイの立ち上げの話が出てから約2年、実際にNPOサーベイの活動をはじめて1年が過ぎました。よちよち歩きの活動へのみなさまのご支援、ご協力に感謝いたします。

私はこれまでに様々な調査に関わらせていただく機会に恵まれましたが、どの調査でも人間の生きる姿に直面し、感動に出会わない調査はありませんでした。

しかし、調査時の感動も、実際に研究としてまとめていく過程で事実を見失いそうになり無力感に陥ることがありました。また、研究としてまとめた結果は、調査に協力して下さった方々が伝えたいことと遠いものになってしまった、ということも少なくありませんでした。

私の場合、これまでこのようなもやもやとした思いや感覚を他の方々と共有することは多くありませんでしたが、このNPOサーベイの活動を通じて何か見えてくるのではないかと、という期待も込めて活動に関わらせていただくことを決めました。

実際に活動をはじめて1年、もやもやとした気持ちは消えることなく、ますます深まる日々が続いています。一方でこのもやもや感に向き合うべきなのでは、と思う自分の変化にも気付きました。

それはNPOサーベイの活動を通じ、固有の、または類似する感覚を抱えて社会調査に関わって

いる方々（社会調査をする側に限りません）がたくさんいらっしゃることを知り、社会調査という活動自体の面白さと奥深さを改めて知ったためかもしれません。

みなさまの調査との関わりが少しでも深まるよう、個人としては目の前のある調査や研究に向かいつつ・勉強しつつ、サーベいのメンバーとしては、サーベいならではのテーマを発信する力のひとつ（頼りなく、恐縮ですが）になりたいと思っています。今後ともゆるく、末永く、お付き合いくださいと幸いです。

設立一周年を迎えて

小倉康嗣

ささやかな足どりではありますが、みなさまのご支援・ご協力のおかげで、NPO サーベいが満一歳の誕生日を迎えました。

最初は暗中模索の状態でしたが、一年を経て、ようやくこのNPOのアイデンティティといえますか、固有の意義について、ぼくのなかで像が結ばれてきたように思います。

社会調査の制度・しくみが高度化し、窮屈で画一的な調査の道具化（ぼくは「社会調査のマクドナルド化」と言っているのですが…）が進行しているように感じる昨今、調査会社でも、シンクタンクでも、大学の形式的な調査プログラムでもない、むしろそこからこぼれ落ちるものの受け皿（コミュニケーションの場）をつくり、社会調査に関するさまざまな困難や障壁を乗り越えていくためのつながりの場としていくこと。そこから社会調査の面白さと奥深さを再発見していくこと。そのために、「社会調査をするひと」だけでなく「社会調査を受けるひと」「社会調査を学ぶひと」「社会調査で知りたいひと」をつなぎ、それぞれの立場からの経験をもちよって、失敗やためらい、迷いを相談し、検討しあえる場をつくっていくこと。それが、ぼくのなかで少しずつ結ばれてきたNPO サーベい像です。

とくに、設立一周年を記念しておこなわれた「社会調査懇談会——その悩みや思いを語る」は、その像をたしかなものにしてくれました。

研究者はもちろん、現場の方、行政マン、実務家、学生、生活者と、当NPOならではの参加者が集い、「現場に役に立つ調査研究とはどういうものか」「そもそも役に立つとはどういうことなのか」「複雑な現場と、テーマや変数を絞らなければならない研究の作法と、私の思いとのあいだの葛藤を、どう解決していけばよいのか」「研究者からヒアリング調査を受けることが多々あるが、必ずといっていいほど自分が言ったことがちゃんと伝わっていないのはなぜか」「当事者ではない人間が当事者の体験をききとることとは、結局どういうことなのか」「目の前のひとに役立つ研究と、論文として成り立つ研究をいかに両立させていくか」「調査につきまとう政治性と調査知見をフィードバックすることの困難性」「調査することの迷惑」等々、それぞれの立場ならではの意見が率直に述べられ、自由闊達な議論がおこなわれました。

現実を共同構築していく時代の社会調査ということに思いを馳せるとき、もしかしたらこれは画期的な場になっているのではないか。ささやかなものかもしれないけれど、エキサイティングでチャレンジングな場が生成されているのではないか。そんな実感を抱きました。

一周年を迎えて、ささやかであっても社会（調査）の脈脈を掘り当てていくような活動を、地道に愚直にやっていきたい。そう決意を新たにしています。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

* * * * *

活動の記録

2009年9月26日 於日本社会事業大学
設立記念ミニ研究会

松尾浩一郎「社会調査史の系譜とNPO サーベい」

大島千帆「福祉の立場からみる社会調査の難しさ面白さ」

小倉康嗣「調査表現と〈参与する知〉」

後藤隆「NPO サーベイ——緩やかで多様な調査活動経験の場」

2010年4月24日 於立教大学

研究会《調査という表現》

小倉康嗣「調査という表現——質的調査を伝える戦略」

松尾浩一郎「調査を発信する技術」

この研究会は以下のような趣旨を掲げて行われました。

——質的調査への関心が広く共有されるようになった現在、統計などでは描き得ない豊かなリアリティを捉えるための調査方法論が、様々な角度から議論され工夫されるようになりました。しかし、調査者がフィールドで感得できたリアリティは、はたして実際の報告や論文の読み手にはうまく伝わっているでしょうか。

私たちは「リアリティの表現」という面で、今日の質的調査は大きな弱点を抱えているように思います。

フィールドでの語りを正確に再現しようとするあまり逆に無味乾燥な記述になってしまった例や、発表時の字数制限に屈して質的調査の命であるはずの「質」がスポイルされてしまった例などに接すると、「質的調査を伝える戦略」の不在を痛感させられます——

こなれた議論ができず勉強不足を感じています。報告者ふたりが主張したかったことは、調査とは「知ること」と同じぐらい「伝えること」なのだ、ということでした。

研究会当日には、著書出版やビジュアル調査などで「伝えること」の工夫を実践されている方々の参加を得ることができました。議論を通じて勉強になりましたし、刺激を受けることができました。(松尾)

2010年7月31日 於立教大学

社会調査懇談会《その悩みや思いを語る》

上村勇夫「「現場に役に立つ」研究について考える」

私は調査初心者および現場&研究両事者という立場から、「現場に役に立つ研究を考える」というテーマで、私の悩んだ体験を中心に話題提供をさせていただきました。話題提供の内容は以下の二点です。

①修士論文のテーマ設定の経緯。「現場に役に立つ」テーマ設定を目指し苦労しました。複雑多岐にわたる「現場」で起こっていることに対する自分の「思い」がある一方で、研究の作法(ex. テーマの焦点化、概念化、先行研究のレビューなど)にのっとりテーマ設定が求められる。その上「現場に役に立つ」ことを目指したので苦労をしました。

②アンケート調査に対する現場側の不信感が感じられるエピソード。今回の勉強会でみなさまから様々なアドバイスをいただき、自分の研究計画の甘さに気づかせいただいたり、また勇気をいただいたりしました。

最も大きな収穫としては、改めて「表現すること」の重要性を認識できたことです。

研究計画の段階では、なぜこのテーマが重要なのか、なぜこの調査方法でやるのか、といったことをきちんと説明できるようにすること、そして調査を終えた後にご協力いただいた方に研究成果をきちんとフィードバックする(論文をただ渡すだけではなく、現場の方になじみやすいように工夫もする)ということ。自分では「役に立つ」と思っている現場にとっては必ずしもそうではないこともあるし、その逆もある。

「役に立つ」ことを意識しつつ現場とのコミュニケーションを密にしていき対話の中でより良い形を見つけていく姿勢を大切にしたいと感じました。(上村)

調査・研究の記録

調査活動

「共同研究『認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム』の全国レベルでの普及を目的とした実践研究」(代表児玉桂子)に参加しました。

施設職員を対象にしたサーベイ調査のデータ分析の一部を担当しています。

研究活動

インターネット調査の方法についての検討を行いました。PHPによるプログラミングやウェブサイトづくりの技術を修得すべく、初歩の初歩から学びはじめました。

日より2年間を任期とする第2期の役員を選任いたしました。小倉康嗣が監事を退任し理事に就任、上村勇夫が新たに監事に就任いたします。

新監事の上村は7月31日の社会調査懇談会で話題提供者となったことをきっかけに、役員に加わることになりました。

一般的には監事とは一歩引いた外部の立場から関わる役職だと思いますが、NPOサーベイのばあい、監事も理事と同じように運営を担ってきました。新監事の上村もNPOサーベイの活動をどんどん引っ張るような活躍をしてくれることと思います。

代表理事 松尾浩一郎

副代表理事 後藤隆

理事 大島千帆、小倉康嗣

監事 上村勇夫

会員関係

NPO法人は法律上10名以上の会員を持つことが要件とされています。設立時その最小規模である会員10名でスタートしました。

この1年間で9名の新しい仲間が加わってくれました。現在19名の会員を擁し、当初より少し大きな組織へと育っています。

不定期で送付させていただいている電子メールでのニュースレターには、39名の購読者が登録されています。

社会学や社会福祉を学ぶ研究者や大学院生が多いですが、それ以外の分野で調査に関心を持つ人や、さまざまな「現場」で生きている人、社会調査を受ける人なども加わってくださっています。

会費納入のお願い

会員の皆様には2010年度会費の納入をお願いいたします。年会費は1口3,000円です。同封した払込票は郵便局のATMなどをご利用になれます。ご協力いただければ幸いです。

口座名義 トクヒ)サーベイ

口座番号 00170-9-568148

初年度の会計については7月に電子メールでお送りした決算書や活動報告書をご覧ください。

第2期役員を選任

設立当初の役員の任期満了にともない、7月31日の理事会・総会において、2010年9月1

NPOサーベイ会報 第1号

2010年9月13日 発行

特定非営利活動法人サーベイ

www.survey-npo.jp

151-0053 渋谷区代々木 2-27-16-902

info@survey-npo.jp